

'13

前期日程

国語小論文問題 (教育学部)



◇M11(707-73)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は五ページです。問題に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等がある場合には申し出てください。
3. 解答には黒鉛筆を使用してください。
4. 文字ははつきりと正確に記入してください。
5. 解答は答案用紙(一)(二)の所定の欄に記入してください。
6. 受験番号を各答案用紙の所定の欄に記入してください。
7. 問題冊子のこのページにも受験番号を記入してください。
8. 退室するときは、答案用紙を(一)(二)の順に重ね、全体を裏返して、机上においてください。
9. 答案用紙を持ち帰ってはいけません。
10. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、問に答えなさい(出題の都合により、本文の一部を改変した)。

観光絵はがきは、そこにはいない、遠い知人に向けて投函される。かつて、こうした観光絵はがきには、「あなたがここにいればよかったのに」「wish you were here」という決まり文句がしばしば記された。「ここ」がどこであるかを指し示すべく、\*印や矢印が絵の中に書き加えられることすらあった。

差出人が差し出すことによって、絵はがきの絵は、単なる珍しい風景ではなく、宛先人のいない風景となる。それは、「あなただけのいない場所なのだ」。

よくよく考えてみれば、差出人が「あなたがここにいればよかったのに」などと書くのは詮ないことだ。「いればよかったのに」と書きながら、差出人は、宛先人がその絵はがきに「二重の意味で間に合わないことを知っている」。

まず、書いている瞬間、宛先人はそこにいない。さらに、そこでは何か書かれたことあるということ、宛先人は知らされていない。それがすっかり書かれ、投函されてしまった後でなければ、宛先人はそれを読むこともできないし、そんなことが自分が宛てて書かれたことすらわからない。

差出人は、このような宛先人の不在と無知を承知で書き続ける。いや、むしろ、宛先人の不在と無知に支えられて、ようやく書き続けることができるというべきではないだろうか。

たとえば、手紙を書いているときに、たまたま宛先人であるあなたが近づいてくる。と、わたしはあわてて手紙を隠そうとする。それは明らかに近づいてくるあなたに向けて書かれているにもかかわらず、わたしはまるで、密会の現場をあやうく見つかりそうになったかのように、必死に手紙を脇にやるだろう。すっかり書き終えてからでなければ、そしてわたしのいないところでなければ、手紙をあなたに読ませるわけにはいかない。

奇妙なことに、書くという行為は、宛先人の存在によって危うくされる。宛先人の視線に曝されるかどうか、書くという行為の命運を左右してしまう。

たとえば、筆談という現象を考えてみよう。

コンピュータが普及した現在もなお、授業中に学生が書くための道具は鉛筆である。そして、多くの学生は、退屈な授業中に、筆談を何度も交わした経験を持っている。

筆談とは、もともと私語を禁じられた状態で声を出さずには交わすためのものである。ここでは手紙文のようなかきこまった文章ではなく、普段の会話と似た調子のことが交わされる。ことばづかいが会話に近く、しかも筆談なのだから、それは、会話と同じように、ことばが発せられる先から相手に読まれてもいつころにかまわないように思える。

しかし奇妙なことに、筆談に熱が入るにつれ、わたしは、書かれた相手の文字を読まないように努力し始める。教師の顔を見たり窓の外を眺めたりしながら、書き手の文面に対しては儀礼的無関心を決め込むようになる。そして、この無関心に支えられるように、相手は黙々とことばを書き進める。

これはもしかしたらわたしの偏った経験なのかもしれないと思い、授業中の学生に、会話によるディスカッションではなく、筆談による議論をしてみよう頼んでみた。すると、おもしろいことに、ほとんどの学生が、次第にすぐ隣にいる相手の文面から目をそらし始めるのである。理屈の上では、書かれることばを逐一読んでいくほうが、自分の番が来たときにすぐに反応できそうなものなのに、黒板やあらゆる方向に視線をやり始める。

筆談を終えた学生に、相手が書いているあいだどうしていたかを訊ねると、「なるべく書いているところを見ないようにした」「こちららと見えてはいたが、あとの楽しみのためにとっておいた」といった回答がほとんどだった。

このような事態は、話しことばでは起こりえない。話し手は、話しながら相手から自分の声を隠すことはできない。聞き手は相手の話す時間から逃れることはできない。録音機でもない限り、聞き手は、相手のことばに対して耳をふさぎ、相手のことばが終わってから耳を傾ける、などということはしないし、相手のことばをちらちら聞いて、あとからまとめて聞き直す、ということもない。いや、たとえそこで録音機が回っていないようにも、わたしたちは、その場で発せられ、言い直されつつあることばを、できるだけその場で聞こうとするだろう。

ところが、筆談で起こることはこれとはまったく異なる。交わされていることは話しことばに近いにもかかわらず、わたしたちは、生まれつつあることばに対してなるべく無関心を装い視線をそらし続ける。そして、この無関心さゆえに、書き手はことばを書き進めることができる。

宛先人に見つめられると、エクリチュールは鈍る。そして、その視線が消えるや、エクリチュールは走り出す。あたかも、宛先人の不在に力を得るように。

エクリチュール……フランス語。「書くこと」「書き方」などを意味する。  
(細馬宏通「絵はがきの時代」より)

問 「無関心さゆえに、書き手はことばを書き進めることができる」のはなぜか。課題文を踏まえて、あなたの考えを書きなさい。(1800字以内)

次の文章を読んで、問に答えなさい。

故向田邦子さんの随筆集「男とき女とき」に「壊れたと壊したは違ふ」というエッセーがある。小学生の時に父親から買ってもらったガラス製の筆立てを落として割ってしまった。なにことに気づいた父親から理由を聞かれ「壊れました」と答えたら——というストーリーだ。今の時代、この「壊れました」に違和感がない人が増えているという。

「壊れました」は、自分のせいではないという責任転嫁だ。何もしていないのに、筆立てがバカッと割れることはない。割れた瞬間にはユリ・ゲラーもビックリだ。また、見て見ぬふりで何もしないことが罪である場合もある。自分の作為、無作為で起きた結果は、わが不徳の致すところと思う発想がない。

エッセーでは、ようやく自分が落として割ったことを認めると、父親は「壊した、壊れたは違ふ。これからもずっとそうしろ」と言ったという。「壊しました」。短い言葉だが、それを聞きたい。

〔スポーツニッポン〕二〇〇九年十一月二十二日

ユリ・ゲラー……超能力者を名乗る人物。

問 右の文章は、「壊れました」と「壊しました」のペアについて述べている。日本語には、このようなペアが数多くある。

〔ア〕（教室でボールを使って遊んでいた生徒が先生に対して）

窓が割れてしまいました。

（私が） 窓を割ってしまいました。

〔イ〕（駅のホームの放送で）

まもなくドアが閉まります。

（私が） まもなくドアを閉めます。

〔ウ〕（来客に対して）

お茶が入りましたので、こちらへどうぞ。

（私が） お茶を入れましたので、こちらへどうぞ。

日本語の使い手として、このようなペアをどのように使いこなしていきたいかを述べなさい。必ず〔ウ〕のペアに言及すること。（四〇〇字以内）